

A-1 アミ語における主要部内在型関係節の再解釈と格標識・リンカーの関係

今西一太* (株式会社エス・アイ代表取締役、広島大学客員講師)

要旨

本発表では、アミ語において主要部内在型の関係節だとみなされている構造を分析し、これが主要部内在型ではなく通常の関係節と同じ構造をしていること、そしてこれまでもっぱら対格の標識だとみなされていた *to* がリンカーとして機能していることを主張する。その根拠は以下の3点である。[1] 「主要部内在型である」という分析を取った場合、関係節内に *to* が現れることになるが、これを対格と考えた場合、動詞の態と意味関係的に一致しないこと、[2] *to* には接続を表しているとは考えられない例が他に2種類存在すること、[3] アミ語以外の台湾原住民語で主格・対格標識とリンカーが同形である例が多く見られ、*a* や *to* (*tu*) などの同源の語が用いられていること。そのうえで、*to* がリンカーと対格標識を兼ねている理由は、名詞と動詞の区別が困難であることが理由で、「動詞 *a* 動詞」の動詞連続と「動詞+目的語」の構造の区別が困難になることが原因であると考えられる。

1. 導入

アミ語¹では通常、関係節を (1) のように「前置された関係節+リンカー *a* + 主要部」という構造で示す。

- (1) Ma-patay=*to* ko-ya [mi-kalat-ay ci-Aki-an] a waco.
PV-殺す=完了 主格-その [AV-噛む-AY 対格-アキ-対格] LK 犬 (呉 2018: 119)
「その[アキを噛んだ]犬は死んだ。」

関係節を含む構造 *mikalatay ciAki-an a waco* 「アキを噛んだ犬」を「その犬はアキを噛んだ」のように主節にすると、以下 (2) のようになる。*-ay* は *factual modality* を表すとされ (Wu 2003)、(2) のような主節では任意だが (1) のような関係節では必須である。

- (2) Mi-kalat(-ay) ko=*waco* ci-aki-an. 「その犬はアキを噛む (噛んだ)」
AV-噛む-(AY) 主格=犬 対格-アキ-対格

このように、主節では主格で表される意味役割の名詞 ((2) の *waco*) が関係節での主要部になるのがアミ語 (および多くの台湾原住民語や「フィリピン型言語」) の特徴である。動作の対象を主要部にする場合、動詞を被動者態 (*patient voice*) に変更する必要がある。

- (3) a.[ma-patay-ay=*ako*] a dadipis 「[私が殺した]ゴキブリ」
[PV-殺す-AY=1 単.属格] LK ゴキブリ (直訳: [私によって殺された]ゴキブリ)

* imanishik923@gmail.com 本発表のアイデアは野島本泰氏との議論から着想を得たものであり、氏に感謝申し上げます。

¹ アミ語はオーストロネシア語族に属する言語で、述部が文頭に来る語順が無標の従属部標示型の言語である。台湾の東部海岸沿いに住むアミ人によって話されている言語である。アミ人自体は15万人~20万人いるが、40代以下の世代はアミ語を流暢に喋ることが出来ない事が多いため、実際の母語話者は民族数の半以下である。文字表記で注意を要するものは以下: <e>=[ə]、<c>=[tʃ] (ただし<i>の前で[te])、<s>=[s] (ただし<i>の前で[se])、<y>=[j]、<d>=[t~d]、<ʔ>=[ʔ]、<o>=[u~o]、<i>=[i~e]。本稿で用いる例文のうち、出典を明示していないものは著者自身がアミ人の調査協力者 (台東県長濱出身の中中部方言話者) から聞き取り調査で得たものである。本稿では以下の略号を用いる。AV: agent voice, PV: patient voice, LK: linker。

b. *[mi-patay-ay kako] a dadipis 「【意図した意味】[私が殺した]ゴキブリ」
 [AV-殺す-AY 1 単.主格] LK ゴキブリ

また、(4) にあるように人称代名詞・人名など一部の名詞を除いて主格は ko/ki で、対格は to/ti で標示する。

(4) Mi-patay=to ko-ya/ki-ya wawa to-ya/ti-ya dadipis.
 AV-殺す=完了 主格-その 子供 対格-その ゴキブリ
 「その子供はそのゴキブリを殺した」

リンカー a は名詞と名詞を繋いだり、動詞と動詞を繋いだりする役割を果たす。

(5) a. fafahiyan a kaka 「姉」
 女 LK 年上キョウダイ
 b. Ma-olah kako a mi-nanam to=sowal no=pangcah.
 AV-好き 私.主格 LK AV-練習する 対格=話 属格=アミ人
 「私はアミ語（アミ人の言葉）を練習するのが好き」

また、Lin (2013: 246) は (6) のような例を主要部内在型の関係節と解釈している。

(6) ya ni-paloma-an ti-ya ropas
 その PV-植える-PV 対格-その 桃
 「その植えられた桃」（主要部内在的に和訳：その桃が植えられたの）

以上を踏まえ、本稿では (6) のような例が、主要部内在型の関係節ではなく、(1) や (3a) のような通常の関係節であり、ti/to は対格ではなく a と同じようなリンカーとしての役割を持つと分析する。その根拠は、[1] 関係節内に主格が現れることは可能であるのに (6) のように対格が現れる理由がわからないこと、[2] to に接続を表しているとしか考えられない例が少なくとも他に2種類存在すること、[3] アミ語以外の台湾原住民語で主格・対格標示とリンカーが同形である例が非常に多く見られ、a や to (tu) などの同源の語が用いられていること、の3つである。そのうえで、なぜ接続表現であるリンカーと対格標示が同じ形式になるのかについての考察を行う。

2. to/ti をリンカーと解釈すべき理由

第2節ではアミ語の to/ti を対格ではなくリンカーと分析すべき方がアミ語記述にとって適切である根拠を挙げ、一部の条件下における to/ti はリンカーと分析すべきである理由を述べる。

2.1. 動詞の態から考えて対格が出るのはおかしい

1つ目の理由は、Lin の言う主要部内在型の関係節において、動詞の態から考えて対格の to/ti が出る理由がわからないことである。以下の (7) の例では ti-ya ropas 「その桃を（対格）」という語句が出ている。

(7) ya ni-paloma-an ti-ya ropas ((6) の再掲)
 その PV-植える-PV 対格-その 桃
 「その植えられた桃」（主要部内在的に和訳：その桃が植えられたの）

しかし、nipalomaan という語は ni-paloma-an と分析でき、paloma は「植える」という意味の語根で、ni-...-an (あるいは mi-...-an²) という接周辞は (8) の例が示すようにある種の被動者態 (patient voice) である。

- (8) Mi-'aca-an=ako nani-widang ko-na rikoh.
 pv-買う-pv=属格.1SG 奪格-友人 主格-これ 服
 「私は友達からこの服を買った」 (直訳: この服は友人から私に買われた)

被動者態なので動作の対象は (8) の kona rikoh のように主格で出現すべきであるにもかかわらず、(7) の例ではなぜか対格で出現している。主要部内在型の関係節であるならば、日本語の「その桃が植えられたの」と同様に主格が出現しなければおかしいはずである。

(3) の例にあるように関係節内では主格の名詞が出現しないという制限があるため、その代わりに対格が用いられている解釈も可能かもしれない。しかし、アミ語における周位的な関係節を分析してみると、関係節内に主格が出現する例もあることがわかる。以下 (9) は所有関係を表す関係節構造において関係節内に主格が用いられている例である³。

- (9) a. Ira ko=cecay a [ma-keni'-ay ko=cecay a mata] a kararayan.
 いた 主格=1 LK [AV-盲目-AY 主格=1 LK 目] LK 鹿
 「[1つの目が盲目である]鹿がいた」 (林 2006: 32)
- b. Sina'eloy kita to='orip no=[ma-dangtes-ay ko=patay] a tamdaw.
 惜しむ 我々 対格=命 属格=[AV-早死に-AY 主格=死] LK 人
 「[死が早死にであった]人の命を我々は惜しむ」 (呉 2013: 77)
- c. Pa'ayaw to=[ma-ri'ang-ay ko=pinangan] a 'adopen.
 手助けする 対格=[AV-悪い-AY 主格=振る舞い] LK 動物
 「[振る舞いが悪い]動物の手助けをする」 (林 2006: 42)
- d. Itiyaho, ira ko=cecay a [ma-podas-ay ko=tireng] a kapah no=Fataan.
 昔 いた 主格=1 LK [AV-疥癬-AY 主格=身体] LK 青年 属格=ファタアン
 「昔ファタアンに、全身に疥癬がある1人の青年がいた。」 (林 2006: 80)

(9) の例のように主格が関係節内に現れ得ることを考えると、(7) において対格が用いられる理由がわからない。それよりは、以下の (10) のように to/ti をリンカーとして分析し、「mi-...-an/ni-...-an の関係節では a ではなく to/ti がリンカーとして用いられる」と分析した方が記述の効率が良い。実際、mi-...-an/ni-...-an の関係節では to が用いられる例が複数見ついている。

- (10) a. Adihay ko=[mi-hecep-an no-ya parok] to nanom.
 沢山 主格=[pv-吸収-pv 属格-その 綿 LK 水

² mi-...-an と ni-...-an の違いについて詳細の調査は出来ていないが、おそらくは方言差によるものであり、北部では ni- が、中部以南では mi- が用いられる傾向があるようである。

³ アミ語において関係節内に主格が現れる例はこれまでテキスト集などで出版された文章には含まれていたが、「所有関係を表す関係節内に主格が出現する」さらに言えば「アミ語において関係節内に主格が出現することがある」という分析を行ったのは管見では本発表が初めてである。

「[その綿によって吸収された]水は多かった」 (林 2006: 38)

b. Lima a dadaongan ko=[ni-ala-an no=mako] to pawli.
5 LK 串 主格=[PV-取る-PV 属格=私] LK バナナ

「私がもらう (私によって取られる)]バナナは5房だ」 (朱 2020: 18)

c. [mi-li-fangs-an] to-ya ma-patay-ay a lofa
[PV-剥ぐ-皮-PV] LK-その PV-殺す-AY LK ロバ

「[皮を剥がれた]死んだロバ」 (林 2006: 34)

2.2. to に接続を表しているとしか考えられない例が他にある

次に、to には接続を表しているとしか考えられない例が他に2種類存在する。まず、呉 (2013: 824) などに「家族関係を表す語彙で to が用いられる」という記述がある。これを対格の用法の一種と考えるのは難しい。家族関係の例は (11c) のようにリンカー a でも見つかっている。

(11) a. kaka to fa'inayan 「兄」 (呉 2013: 824)

年上キョウダイ TO 男

b. wawa=ako to fafahiyan 「私の娘」 (朱 2020: 168)

子供=1 単.属格 TO 女

c. fa'inayan a kaka 「兄」

男 LK 年上キョウダイ

それ以外にも対格とは考えづらい、名詞と名詞を接続しているような例がある。

(12) Faeket-en kako ti-na 'inorong to kasoy.

重い-感じる 私は 対格-これ 担いでいるもの TO 薪

「私はこの担いでいる薪が重いと感じる」 (朱 2020: 50)

これらの例は対格とは考えづらく、「名詞+名詞」の語句を作る to のリンカー的な用法の一種と考える方がよい。

さらに、アミ語において「A と B」などの並列を表す語である ato の例を挙げる。これは mama ato wina 「父と母」のように接続を表すのであるが、あたかもリンカーの a と対格の to がつながってできているように見える。しかし (13) のように主格 ko の名詞句内で用いる場合でも、主格の ko を含む *ako という形態ではなく、ato が用いられる。

(13) Tayni=ho ko=mama ato/*ako wina =ako i-Taiwan.

来る=まだ 主格=父 と 母=属格.1 単 場所格-台湾

「私の父と母は台湾に来たことが無い」

さらに、人名の標示を見てもよい (人名は (14a) (14b) のように主格が ci- で、対格が ci-...-an で標示される)。この場合、(14c) のように、主格の語句内で「A と B」と述べる際にリンカーの a と主格の ci- の組み合わせであると思われる aci- という形態が出現し、対格の目印である -an は出現せず、「主格 a 主格」という構造が出る。つまり対格は出て来ず、「名詞と名詞を a で結ぶ際には対格を用いる」という決まりは存在しないことがわかる。

- (14) a. Mi-licay kako ci-Kacaw-an.
 AV-質問する 1 単.主格 対格-カツァウ-対格
 「私はカツァウに質問します」
- b. O=singsi ci-kacaw. 「カツァウは先生です」
 述語=先生 主格-カツァウ
- c. O=singsi ci-kacaw aci-Panay(*-an). 「カツァウとパナイは先生です」
 述語=先生 主格-カツァウ ACI(A+主格?)-パナイ(*-対格)

以上から、to を対格と分析すると「人名名詞でないときだけ主格の語句内に対格の標示が現れる」という非効率的な分析となり、a + to という組み合わせが主格の名詞句内に出てくる理由をうまく説明できない。一方、本発表のように to にリンカーとしての用法があると考えれば、主格の名詞句なのに a と共に to が出てくることも自然に説明が可能である。すなわち、a も to も接続の用法があるので、2 つを組み合わせで接続詞のように利用している、ということである。

これまでの議論をまとめると、to/ti には対格の用法もあるが、[1] ni-...-an/mi-...-an の関係節と主要部を結ぶ際、[2] 家族関係やその他一部の名詞同士の接続を示す際、[3] ato という表現、の少なくとも3種類の状況ではリンカーとしての用法を持つと分析する方が記述的には便利である。

2.3. アミ語以外の台湾原住民語で「格標示＝リンカー」の例が非常に多い

アミ語ではこれまで報告がないが「リンカーと格標識が同形」という例はアミ語以外の台湾原住民語で非常に多く見られる。アミ語に同様の現象があっても不思議ではない。

表1：台湾原住民語における格標示とリンカーの関係

主格とリンカーが同形	ブヌン語 パイワン語 クヴァラン語 サアロア語	Blust 2015: 30, Pan 2012, 黄・施 2018, 張 2018
対格もしくは斜格とリンカーが同形	パゼッヘ語 シラヤ語 ファボラン語 クヴァラン語	Li 1978, Ross 2006: 5, Li and Tsuchida 2006

アミ語の a/to と同源であると思われる語が格標示かつリンカーとして用いられる言語も存在する。例えばブヌン語では (15) のように a が主格かつリンカー、tu がリンカーとして用いられる。

- (15) M-insumin **a** [s<in>izas inaak **tu** ahil] **a** bunun=a. (黄・施 2018: 225)
 AV-来た 主格 <AV>取った 私.属格 LK 本 LK 人=限定詞.主格
 「[私の本を取った]人が来た」

クヴァラン語では (16) に示すように a も tu もリンカーと格標識の両方の用法がある。

- (16) a. Suaneman-na=ti **a** suani-na, (Li and Tsuchida 2006: 49)
 騙される-3 単.属格=完了 主格 弟-3 単.属格
 「彼女は自分の弟をだました (直訳：彼女の弟は彼女に騙された)」
- sinunungi=ka ya razan **a** yau.
 まっすぐ行く=命令 主格 道 LK それ
 「その道をまっすぐ行きなさい」

b. M-ara tu qawpiR, saru. (Li and Tsuchida 2006: 51)
 AV-取る 斜格 サツマイモ カボチャ
 「さつまいもとカボチャを取った」

c. "Ara=ita uRu-na," zin-na tu
 取る=我々 頭-彼ら.属格 言う-彼ら.属格 LK
 aran-na=ti a uRu-na. (Li and Tsuchida 2006: 51)
 取られた-彼ら.属格=完了 主格 頭-彼ら.属格
 「『彼らの頭を取ろう』と彼らは言い、そして彼らの頭は取られた」

このように、格標示とリンカーが同様の形式である例は台湾原住民語において枚挙にいとまがない。

以上の3つの理由により、Lin のいう「主要部内在型の関係節」は主要部内在型ではなく、to をリンカーとして利用した主要部外在型の通常の関係節である、と結論付ける。

3. 対格とリンカーが同形になる理由

それではなぜ対格とリンカーが同形なのだろうか。それは、動詞と名詞の区別があいまいで、動詞連続（動詞 a 動詞）と動詞+目的語（動詞 to 名詞）の区別があいまいになるということに起源がある可能性がある。

(17) a. Ma-olah kako a minanam to=sowal no=pangcah.
 AV-好き 私.主格 LK 練習する 対格=話 属格=アミ人
 「私はアミ語を練習するのが好き」

b. Maolah kako to=sowal no=pangcah. 「私はアミ人の言葉が好き」
 AV-好き 私.主格 対格=話 属格=アミ人

(17a) では maolah (kako) a minanam 「(私は) 練習するのが好き」という動詞連続でリンカー a が、(17b) では名詞句 sowal no pangcah が maolah の対象で対格 to が用いられている。しかし、アミ語では述部以外の環境で名詞と動詞の区別が明確ではない（台湾原住民語にはアミ語よりさらに名詞と動詞の区別が難しい言語も多い）。例えば以下 (18) では malalok 「まじめ(な人)」が、主格 ko の「名詞」句内にも表れるし、述部に単独で「動詞」として現れる。

(18) a. Ci-Panay ko=ma-lalok. b. Ma-lalok ci-Panay.
 述部-パナイ 主格=AV-まじめな人 AV-まじめだ 主格-パナイ
 「真面目な人はパナイだ」 「パナイは真面目だ」

したがって (17a) の maolah (kako) a minanam 「(私は) 練習するのが好き」と (17b) の maolah (kako) to sowal 「(私は) 言葉が好き」はアミ語の中では（動詞と名詞の区別がほとんどないので）それほど違いのあるものとは認識されていない可能性が高い。言い換えれば、アミ語のように動詞と名詞の区別が明確ではない言語では両者はほとんど同じものと認識される場合がある、ということである。このような混同を起源とし、リンカーと対格標示の混同（同一形態）という現象が生じていると思われる⁴。

⁴ 主格とリンカーが同じ形式になる理由については別の原理、動詞連続が起こる動詞句において語順が自由で、それが関係節にも反映され、主要部内在のような形になるからであると考えられる。以下 (Aa) (Ab) はどちらも可能な語順であり、その語順が (B) のような関係節構造になってもそのまま反映される。

4. 結論

to/ti はこれまでもつばら対格の標識と分析されてきたが、ni-...-an/mi-...-an の関係節と主要部を結ぶ際のリンカーとしても機能していると考えらるべきである。その根拠としては、[a] 関係節内に主格が現れることは可能であるのに (6) のように対格が現れる理由がわからないこと、[b] to に接続を表しているとしか考えられない例が他に存在すること、[c] アミ語以外の台湾原住民語で主格・対格標識とリンカーが同形である例が非常に多く見られ、a や to (tu) などの同源の語が用いられていること、の3つが挙げられる。

また、リンカーと格標識が同形態になる理由としては、動詞と名詞の区別があいまいで、動詞連続（動詞 a 動詞）と動詞+目的語（動詞 to 名詞）の区別があいまいになるということに起源がある可能性がある、ということを中心とした。

参考文献

- Blust, Robert (2015) "The case markers of Proto-Austronesian." *Oceanic Linguistics* 54, 436-491.
- 黃慧娟、施朝凱 (2018) 『布農語語法概論 第二版』新北：原住民族委員會。
- Lin, Dong-yi (2013) *Interrogative constructions in Kavalan and Amis*. PhD dissertation, University of Florida.
- 林生安 (2006) 『阿美語譯伊索寓言』台北：使徒出版社有限公司。
- Pan, Chia-jung (2012) *A grammar of Tha'alua*. PhD dissertation, James Cook University.
- Li, Paul Jen-kuei (1978) "Case marking systems of the four less-known Formosan languages." *Second International Conference on Austronesian Linguistics: Proceedings*, ed. by S.A. Wurm and Lois Carrington, 569-615. Canberra: Pacific Linguistics.
- Li, Paul Jen-kuei and Shigeru Tsuchida (2006) *Kavalan dictionary*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.
- Ross, Malcom (2006) "Reconstructing the case-marking and personal pronoun systems of Proto Austronesian." In Chang, Huang and Ho (eds): *Streams converging into an ocean: Festschrift in honor of Professor Paul Jen-kuei Li on his 70th birthday*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica, 521-564.
- Wu, Joy Jing-lan. 2003. 'Clausal modifiers in Amis.' *Concentric: Studies in English Literature and Linguistics* 29.2, 59-81
- 吳靜蘭 (2018) 『阿美語語法概論 第二版』新北：原住民族委員會。
- 吳明義 (2013) 『O pidafo'an to sowal misanopangcah 阿美族語辭典』台北：南天書局。
- 張秀絹 (2018) 『排灣語語法概論 第二版』新北：原住民族委員會。
- 朱清義 (2020) 『新觀念阿美語語法』花蓮：朱清義。

(A) a. Malalok ko=wawa a micodad 「その子はまじめに勉強する」

真面目 主格=子供 LK 勉強する

b. Malalok a micodad ko=wawa 「その子はまじめに勉強する」

真面目 LK 勉強する 主格=子供

(B) a. Maolah ko=singsi to=malalok-ay a wawa a micodad

好き 主格=先生 対格=真面目-AY LK?/主格? 子供 リンカー 勉強する

b. Maolah ko=singsi to=malalok-ay a micodad a wawa

好き 主格=先生 対格=真面目-AY LK 勉強する LK 子供

「先生はまじめに勉強する子供（子供がまじめに勉強するの）が好きだ」（ABの例文は朱 (2020) より）